沖縄県浦添市城間方言の助詞〈ガ〉〈ヌ〉について

内間　早俊

キーワード：沖縄県浦添市城間方言、〈ガ〉・〈ヌ〉、主格用法、連体用法、ウチ・ソト意識

要旨

琉球方言の助詞〈ガ〉、〈ヌ〉はそれぞれ主格表示と連体格表示を担いながら、その承ける体言をウチなる対象か、ソトなる対象かによって使い分けを区別しているとされる。それと同時に現代共通語のような主格表示か連体用法かという文法的機能によって使い分けを見せる側面もある。本論では沖縄県浦添市城間方言の助詞〈ガ〉、〈ヌ〉を取り上げ、その承ける体言に着目し、老年層、中年層でどのような使い分けが行われているかを明らかにした。

1．はじめに

琉球方言において〈ガ〉、〈ヌ〉という二つの助詞が主格を示したり連体格を示したりすることは既に知られている。主格用法では taru: ga ʔitʃuN（太郎が行く）や saba nu ʔaN（草履がある）のように用いられ、連体用法では kuri ga muN（こいつのもの）や ki: nu ni:（木の根）などのように用いることができる。それぞれの使い分けについては内間(1990),(1994)、内間・新垣(2000)などに詳しいが、概略、〈ガ〉はウチと捉える対象を承け、〈ヌ〉はソトと捉える対象を承けると言われている。大野(1978)でも古代中央語の「が」と「の」の使い分けの差がウチとソトという区分であると述べており、この二助詞の問題は琉球方言が古代中央語に通ずる一例であると言えよう。

ところが、一概に〈ガ〉〈ヌ〉の使い分けはウチ・ソト意識であると言っても、それぞれの方言で何をウチと捉え、ソトとは何であるかというのは一様ではない。主格表示に〈ガ〉しかない与那国方言や、主格用法、連体用法ともに〈ヌ〉しか現れない八重山方言などもあり、ウチ・ソト意識による使い分けがなくなっていることもある。また沖縄方言内でも〈ガ〉と〈ヌ〉の承ける対象は地域によっていくらかの差が見られるようである。

これらのことを踏まえた上で、本稿では沖縄県浦添市城間方言を取り上げ[注1]老年層[注2]の助詞〈ガ〉、〈ヌ〉の主格用法と連体用法でどのような体言が上接するか[注3]について記述しそこにどのような使い分けの差が見られるかを論じ、さらには中年層[注4]でその使い分けがどう変化しているかについても考察を加えていく。使い分けの基準は、〈ガ〉〈ヌ〉を取り

扱った先行研究である先掲の内間(1990),(1994)、内間・新垣(2000)のものを参考にする。その中でウチ・ソト意識による体言の分類を行っているが、これは助詞に限らず琉球方言の諸事象を統一的に説明する一つの視座と考えられるので、本論ではさしあたってその術語による体言の分類をおこなっていきたい。

以下、本文中の用例は簡略音声表記で示す。

2．老年層の助詞〈ガ〉〈ヌ〉

2．1．　主格用法

〈ガ〉の承ける体言

○自称・対称の代名詞

wa: ga ʔitʃuɴ（私が行きます）、ʔja: ga ʔitʃumi（お前が行くか）

○指示代名詞（人、事物）

ʔuri ga ʔitʃun do:（こいつが行くぞ）、ʔunu tʃu ga ʔmense:ɴ（この人がいらっしゃった）

ʔari ga jumuɴ（彼が読む）、ta: ga sa ga（誰がしたか）、ʔari ga nagasaɴ（あれが長い）

○親族呼称

ʔusume: ga nːdʒimise:taɴ（おじいさんがご覧になった）、ʔuɸusu: ga mo:tʃaɴ（おじさんがいらっしゃった）、ʔamma: ga ndʒi ku: di ʔi:taɴ（お母さんが行って来いと言った）

○人名

taru: ga tʃu:ɴ（太郎が来る）、tʃiru: ga ko:juɴ（鶴ちゃんが買う）、koidzumisaŋ ga ko:imiʃe:ɴ（小泉さんがお買いになる）、ʃo:tokutaiʃi ga ma:ʃimiso:tʃaɴ（聖徳太子が亡くなった）

以上のように、主格表示を担う〈ガ〉の上には自称・対称の代名詞、指示代名詞（人、事物）、親族呼称、人名などの体言を承けており、これらの体言は自分にとってウチと捉える対象と言える。「人名」で身近な対象とは考えにくい「小泉さん」（元総理大臣）や「聖徳太子」も現れているが、これは本来「太郎」や「鶴ちゃん」のように我にとってウチなる存在で用いられていた〈ガ〉の用法が「人名」というカテゴリーの中で定型化したものと考えてよいだろう。

次に〈ヌ〉が承ける体言について見ていく。

〈ヌ〉の承ける体言

○親族名称を承ける

ʔuttu nu/ga ko:juɴ（弟が買う）、ʃi:dʒa nu/ga ʔitʃuɴ（兄が行く）

○指示代名詞（場所）を承ける

ʔamajaka kuma nu/ga ru ʃirasaru（あそこよりここが涼しい）

○一般名詞を承ける

ʔunu ki: nu/ga ʔakụtu ʃirasan ro:（この木があるから涼しいよ）、maja: nu/ga wuN（猫が居る）

saba nu/ga ʔakụtu kutso: ne:ntin ʃimusa （草履があるから靴はなくても良い）

このように〈ヌ〉は親族名称、指示代名詞（場所）、一般名詞などを承ける。〈ガ〉の承ける体言と比べるとソトと捉える対象であると言える。ただし例文にも示しているとおり、これらの体言は〈ヌ〉と同時に〈ガ〉で承けることも可能で、主格表示の機能を現代共通語と同様に〈ガ〉が担う方向へと変化しつつある様子が窺える。老年層の〈ガ〉と〈ヌ〉が持つ主格用法についてまとめると次の表1のようになる。

表１．主格用法（老年層）

	承ける対象	助詞
ウチと捉える対象	自称・対称の代名詞 指示代名詞（人、事物） 親族呼称 人名	ガ
ソトと捉える対象	親族名称 指示代名詞（場所） 一般名詞	ヌ

２．２．　連体用法

次に老年層で〈ガ〉、〈ヌ〉が連体用法を担う際にどのような体言を承けるか見ていく。

〈ガ〉の承ける体言

○指示代名詞（人）

kuri ga muN（こいつのもの）、ʔari ga muN（あいつのもの）

○数詞

tai ga naka（二人の仲）、mittʃai ga muN（三人のもの）

数詞は語によって次のように無助詞で用いられることもある。

tʔa: mi:tunra （二組の夫婦）

ただし、これは現代共通語でも「二クラス」、「五大陸」と使われるようにもともと助詞を必要としない形式である。

主格表示の際に〈ガ〉で承けた自称・対称の代名詞、人名、親族呼称が連体修飾を形成

する場合には次のように無助詞の形式で用いられるのが一般的である。

○自称・対称の代名詞、人名

wa: muN jasa（私のものだ）、ʔja: tamaʃi do:（お前の分だ）、tʃîru: muN（鶴ちゃんのもの）

○親族呼称

ʔappi: muN（兄のもの）、ʔamma: muN（お母さんのもの）、ʔaba: muN（お姉さんのもの）

ha:me: muN（おばあさんのもの）

以上のように〈ガ〉の承ける体言は指示代名詞、数詞、自称・対称の代名詞、親族呼称で自分にとって身近なもの、ウチと捉えられる対象である。これは主格表示での用法と平行的であると言える。

次に〈ヌ〉の場合について見ていく。

〈ヌ〉の承ける体言

○指示代名詞（事物）

ʔuri nu/ga nagasa ja ʔintʃasaN（これの長さは短い）

このように、指示代名詞（事物）では〈ガ〉と〈ヌ〉が両方使用されている。話者の内省では、上記の例文の場合〈ガ〉よりも〈ヌ〉の方をより多く使用するようで、このゆれはウチと捉える対象とソトと捉える対象がゆれていることを意味すると考えられる。

○指示代名詞（場所）

ʔure: ʔuma nu saki jan ro:（これはここの酒だぞ）、ʔure: ma: nu ʔiju jaga（これはどこの魚か）、kuma nu tʃu（ここの人）

○親族名称

ʔuttu nu muN（弟のもの）、ʃi:dʒa nu muN（兄のもの）

○一般名詞

tʃu: nu mun du jaru（人のものだぞ）、tʃu: nu mun tu du: nu mun wakaranna:（人のものと自分のものわからないのか）、ki: nu ni:gui（木の根っこ）na: nu kusa（庭の草）

このように〈ヌ〉の承ける体言は指示代名詞（場所）、親族名称、一般名詞などである。主格用法と平行して、体言がソトと捉えられる対象の場合には〈ヌ〉で承けられていることがわかる。

以上、連体用法についてまとめると次ページの表２のようになる。

２．３．　老年層の助詞〈ガ〉〈ヌ〉について

老年層では、主格用法、連体用法ともに、自分にとってウチと捉える対象を承ける時は〈ガ〉を用い、ソトと捉える対象を承ける時には〈ヌ〉を用いていた。それでも、主格用

表２．連体用法（老年層）

	承ける対象	助詞
ウチと捉える対象	自称・対称の代名詞	ガ
	親族呼称	
	人名	
	指示代名詞（人）	
	数詞	
	指示代名詞（事物）	
ソトと捉える対象	指示代名詞（場所）	ヌ
	親族名称	
	一般名詞	

法で本来〈ヌ〉で承けられるはずのソトなる対象の場合に〈ガ〉を用いる用例が確認される。これはちょうど国語史上、室町期から江戸期にかけて「が」が主格表示の機能に特化していくのと似ており、城間方言においても〈ガ〉が主格表示のほうへと傾斜していく過程を示していると言えるだろう。一方、連体用法においては〈ガ〉と〈ヌ〉の承ける体言はかなり明確に区別されており、〈ガ〉はウチと捉える対象を、〈ヌ〉はソトと捉えられる対象を承けている。すなわち、主格用法では〈ガ〉が〈ヌ〉の領域まで拡大し主格表示を〈ガ〉が担う方向へと変化してはいるが、連体用法においてはまだウチ・ソトという区別を一応保っていると考えられる。ただし、指示代名詞（事物）を承けるときに〈ガ〉、〈ヌ〉の両方が現れていることを考えると、いずれ連体用法を〈ヌ〉が単独で担い現代共通語のような体系に移行する可能性も考えられる。

３．中年層の助詞〈ガ〉〈ヌ〉

次に中年層において〈ガ〉と〈ヌ〉がそれぞれどのように用いられているのか記述していく。記述の順序は老年層のものに準じる。

３．１．　主格用法

〈ガ〉の承ける体言

○自称・対称の代名詞を承ける

waŋ ga ʔitʃuɴ（私が行く）、ʔja: ga jume:（お前が読め）

○指示代名詞（人・事物）を承ける

ʔuri ga mbusaɴ（こいつが重い）、ʔari ga kamuɴ（彼が食べる）、ʔari ga ru wassaru（あいつが悪いのだ）、ta: ga su ga（誰がするか）、ʔari ga nagasaɴ（あれが長い）

○親族呼称を承ける

odʒi: ga ʔitʃuɴ（おじいさんが行く）、odʒisaŋ ga ke:taɴ（おじさんが帰った）

okka: ga kamuɴ（お母さんが食べる）

○人名を承ける

ke:ko ga tʃu:ɴ（恵子が来る）、taka ga ke:juɴ（貴が帰る）、koidzumiso:ri ga tʃu:ɴ（小泉総理が来る）、ʃo:tokutaiʃi ga ma:saɴ（聖徳太子が死ぬ）

このように〈ガ〉が主格用法をもつときは、中年層においても老年層と同様にウチなる対象を承けて用いられていると言える。次いで〈ヌ〉の承ける用法を見ていく。

〈ヌ〉の承ける体言

○指示代名詞（場所）

kuma nu/ga ru-wan ja:（ここが私の家だ）、ʔuma nu/ga ʃikanre: ʔamaŋkai ʔike:（ここが嫌ならあそこへ行け）

○一般名詞

ki: nu/ga kari:ɴ（木が枯れる）、dzo:ri nu/ga neŋ kuᵝtu ke:raraɴ（草履がないから帰れない）、jida nu/ga wu:ri:ɴ（枝が折れる）、maja: nu/ga wuɴ（猫がいる）

〈ヌ〉で承ける対象も老年層との差はほとんど見られず、ソトと捉える対象を承けて用いられていることがわかる。〈ガ〉と〈ヌ〉の主格用法をまとめると次のようになる。

表３．主格用法（中年層）

	承ける対象	助詞
ウチと捉える対象	自称・対称の代名詞 指示代名詞（人、事物） 親族呼称 人名	ガ
ソトと捉える対象	親族名称 指示代名詞（場所） 一般名詞	ヌ

3．2．連体用法

〈ガ〉の承ける体言

○指示代名詞（人、事物）

kuri ga muN（こいつのもの）、kuri nu nagasa（これの長さ）、ʔari nu nagasa（あれの長さ）

○自称・対称の代名詞、人名

これらは老年層と同様、次のように〈ガ〉を介さず直接体言に接して用いられるのが一般的である。

wa: muN（私のもの）、ʔja: tamaʃi（お前の分）、ke:ko muN（恵子のもの）

ただし、人名が上接する場合、強調表現として次のように〈ヌ〉を介する場合があり、このような用例は老年層では見られなかったものである。

〔三名分のおやつがあって、二人は既に食べてしまったにも関わらず、そのうちの一人が残っているものをこっそり食べようとしている様子に気づいてそれを諫める時〕

ʔure: ke:ko nu tamaʃi jakutu kamaŋke jo:（これは恵子の分だから食べるなよ）

因みにこの場合、老年層では次のように強調の係助詞[ru]（係助詞「ぞ」に対応）を用いて表現されるため〈ヌ〉という形式が現れることはない。

ʔure: ke:ko mun ru jaru.　kamaŋke jo:（これは恵子のものだぞ。食べるなよ）

○親族呼称

これも一般的には助詞を介さずに用いられる。

okka: muN（お母さんのもの）、oto: muN（お父さんのもの）、oba: muN（おばあさんのもの）、odʒi: muN（おじいさんのもの）

また、親族呼称でも[oto:]（父）、[okka:]（母）以外では強調表現として次のように〈ヌ〉を介する場合があり、これも新しい用法であると言える。

oba: nu muN（おばあさんのもの）、odʒi: nu muN（おじいさんのもの）

これらの用例から、老年層で見たように本来自分にとってウチなるものを〈ガ〉で承け、ソトと捉える対称を〈ヌ〉で承けるという使い分けは希薄になり、現代共通語のような主格表示は「が」が担い、「の」は連体用法に用いられるという方向へと変化していると考えられる。ただし、単に連体用法を担うのでなくそこに「強調」という意が含まれるというのは注意しなければならないだろう。一方で[oto:]（父）、[okka:]（母）という体言が〈ヌ〉で承けられないことから考えると現代共通語のような用法に変化しながらも、老年層の方言に見られるウチ・ソトの意識がまだ根深く残っている語があると考えられる。続いて〈ヌ〉の承ける体言について見ていく。

〈ヌ〉の承ける体言

○指示代名詞（人）の一部

ʔari ga/nu muN（あいつのもの）

先ほどkuriを承けてkuri ga muN（こいつのもの）となる例を出したが、kuriの場合に用いることのできなかった〈ヌ〉が上の例のようにʔariに続く場合には用いられる[注5]。中年層においてこのような例が見られるのも、現代共通語では連体用法を「の」が担うということに影響されゆれているためと考えられる。しかしkuriや事物の指示代名詞にはそれが見られないというのは、先ほどのoto:やokka:に対して〈ヌ〉が用いられなかったのと同様に、中年層でまだ根深くウチ・ソトの弁別意識を残していることを示しているだろう。

○数詞

tai nu/ga naka（二人の仲）

mittʃai nu/ga muN（三人のもの）

○親族名称

ʔuttu nu/ga muN（弟のもの）、ʃi:dʒa nu muN（兄のもの）

このように「指示代名詞（人）」、「数詞」、「親族名称」を承けて用いられる助詞を見ると、老年層で〈ガ〉もしくは〈ヌ〉のいずれかで承けていた体言が中年層ではかなり混乱していると言える。連体用法を示す場合に〈ヌ〉の領域が〈ガ〉の領域まで拡大するのみであれば、現代共通語の影響を受けたと考えることができるが、もともと老年層では〈ヌ〉が単独で承けていたʔuttuなどを〈ガ〉で承けたりする用例があることを考えると、〈ガ〉、〈ヌ〉それぞれの担う領域が曖昧になっていると考えたほうが良いだろう。「親族呼称」、「指示代名詞」で老年層のウチ・ソト意識が引き継がれて使い分けの混乱を免れたと考えられる「父」、「母」、「こいつ」などがある一方で、「数詞」や「親族名称」においては混乱を来しているのが中年層の現状である。特に「親族名称」ではʔuttuとʃi:dʒaで助詞の使い分けが異なっており、中年層におけるゆれの一端を見せていると言えよう。

○指示代名詞（場所）

ma: n[注6] tʃu（どこの人）、wanne: ʔuma n tʃu jan ro:（私はここの人だ）、ma: nu ʔiju jaga（どこの魚か）

場所を示す指示代名詞は老年層と同様〈ヌ〉が用いられている。

○一般名詞○

tʃu: nu mun ru jakutu sawaraŋke:（人のものだから触らないでおけ）、ki: nu ni:（木の根）、na: nu kusa（庭の草）、ʔikusa nu ʔatu（戦の後）

以上のように、承ける体言に注目して考えると中年層でもウチと捉える対象は〈ガ〉で承けて、ソトと捉える対象は〈ヌ〉で承けるという基本的な区別は残しているように思われるが、体言によってその区別が曖昧になっている様子も窺い知ることができる。これらをまとめると次の表4のように表すことができる。

表4．連体用法（中年層）

	承ける対象	助詞
ウチと捉える対象	自称・対称の代名詞 親族呼称 人名 指示代名詞（人、事物） 数詞 指示代名詞（人）の一部 親族名称	ガ
ソトと捉える対象	人名（強調表現として） 親族呼称の一部（強調表現として） 指示代名詞（場所） 一般名詞	ヌ

4．まとめ

さて、老年層、中年層における助詞の用法を記述しながら、各現象に対して個別に述べてきたのでここであらためてまとめておきたい。

4．1．老年層と中年層の〈ガ〉と〈ヌ〉の比較―　主格用法の場合

老年層において〈ガ〉と〈ヌ〉の承ける体言の基本的な差は、その体言が自分にとってウチと捉える対象か、ソトと捉える対象かという意識に支えられていたと言える。ウチと捉える対象には「自称・対称の代名詞」、「指示代名詞（人・事物）」、「親族呼称」、「人名」などがあり、ソトと捉える対象には「親族名称」、「指示代名詞（場所）」、「一般名詞」があった。ソトと捉える対象を承けて主格表示する〈ヌ〉がウチと捉える対象を承けることはないが、その逆、すなわちウチと捉える対象を承けて用いられる〈ガ〉がソトと捉える対象を承けて〈ヌ〉と平行的に使用されることはあった。

以上のことから老年層においては〈ガ〉という助詞がウチと捉える対象を承けるという

枠を越えて、広く主格表示をする用法へと変化しつつあることを述べた。

中年層における〈ガ〉と〈ヌ〉の使い分けもほぼ老年層と平行しており、主格用法においては世代間での使い分けの差はないと言ってよいだろう。

4．2．老年層と中年層の〈ガ〉と〈ヌ〉の比較―　連体用法の場合

連体用法では老年層と中年層に差が現れたので、まず老年層の用法からまとめていく。

老年層において〈ガ〉の承ける体言はやはりウチと捉える対象であり、そこには「自称・対称の代名詞」、「親族呼称」、「人名」、「指示代名詞（人）」、「数詞」が含まれる。一方〈ヌ〉の承ける体言は「指示代名詞（場所）」、「親族名称」、「一般名詞」などで、これらはソトと捉える対象である。すなわち老年層において〈ガ〉と〈ヌ〉は承ける体言がウチなる対象か、ソトなる対象かということで区別を保って使用されているが、「人称代名詞（敬称）」の[ʔundʒu]（貴方）や「指示代名詞（事物）」などの語で〈ガ〉と〈ヌ〉の両方を使用することができ、使い分けに混乱をきたしている様子も窺えた。

ここで近隣の方言である前島方言について触れておきたい[注7]。前島方言の主格用法では〈ガ〉が〈ヌ〉の承ける領域まで拡大しておりこれは城間方言と同様である。しかし、連体用法においては〈ヌ〉が〈ガ〉の領域まで完全に入り込んでおり、城間方言では〈ガ〉が単独で承けていた「自称・対称の代名詞」、「人名」、「親族呼称」、「指示代名詞（人）」、「数詞」などまで〈ヌ〉が承けることができる。すなわち、当該方言で主格表示は〈ガ〉が広く担い、連体用法では〈ヌ〉がその機能を担うという変化を遂げているのである。このように前島方言と比べると、城間方言の老年層における連体用法はまだ古代語的な区別で使用されていると言えるだろう。

ところが中年層においては老年層での区別がかなり曖昧になっていると言える。中年層で〈ガ〉の承ける体言は「自称・対称の代名詞」、「人名」、「親族呼称」、「指示代名詞（人、事物）」、「数詞」、「親族名称」などであるが、このうち「数詞」、「指示代名詞（人）の一部」、「親族名称」に関しては〈ヌ〉が承ける用例も現れている。〈ヌ〉が単独で承ける体言には「指示代名詞（場所）」、「一般名詞」があり、強調表現として「人名」、「親族呼称の一部」に用いられることもあった。老年層と中年層の用法を比べて変化が見られたのは（1）人を表す指示代名詞kuriとʔariが伴う助詞、（2）数詞を〈ガ〉と〈ヌ〉の両方が承ける、（3）親族名称を〈ガ〉が承けるようになる、（4）強調表現として〈ヌ〉が用いられる、といった点である。

では、これら種々の変化を促すのは何だったのであろう。もちろん共通語化のあおりを受けて、現代共通語の体系から連体用法には〈ヌ〉を用いる方向へ変化したことが一番に

考えられるが、それだけでは説明できない点もあると思われる。例えば（1）のようになぜkuriは〈ガ〉が承け、?ariに〈ガ〉、〈ヌ〉の両方が用いられるのか、また（3）のように老年層で〈ヌ〉が承けた親族名称?uttuに中年層は〈ガ〉も用い、一方でʃiːdʒaには〈ヌ〉のみしか使用しないといった点、（4）のように〈ヌ〉を用いてなぜ強調表現が成立するかなどである。このようなことを説明するためには、やはり中年層におけるウチ・ソト意識の変化または混乱を考えなければならないと思われるのである。すなわち、何をウチとして捉え、ソトと捉える対象が何であるかという基準が老年層より曖昧になってきていると考えられるのである。（1）から（3）の現象はこのような中年層のウチ・ソト意識の変化が表現として顕在化したと考えられないだろうか。また（4）のように〈ヌ〉を用いることで強調表現を担うというのは普段自分にとってウチと捉える対象に対して、本質的には対象をソト扱いして捉える〈ヌ〉が承けることで上の体言をソト扱いにし、表現上の強調表現を形成するに至ったのではないだろうか。これを円滑にしたのが、〈ヌ〉を承けて強調表現を作る体言がもともと「体言＋体言」のように無助詞で連体用法を示していたということが考えられる。そのために〈ヌ〉という助詞がよりスムーズにはいりこむことができたと考えられるのである。また同時に、現代共通語で「の」が連体用法を担うという体系もそこに〈ヌ〉をはいりこむ状況を促進していたと考えられるのである。

以上、城間方言の助詞〈ガ〉〈ヌ〉について記述し世代間の用法の差についても考えてきた。しかし、本論の課題は多く今後検討していかなければならない点も多い。それを次に挙げていく。

5．今後の課題

本論の課題は多いが、そのうち重要と思われる点について挙げる。

（1）承ける体言の範囲をさらに広げて記述をおこなう必要がある。今回は先行研究の分類に従って調査をおこなったが、今後は特に奈良時代の「が」と「の」の承ける体言を視野に入れる必要がある。

（2）自称・対称の代名詞、人名などがなぜ一般的には無助詞で連体用法を形成するかを明らかにするのも重要な課題である。

（3）調査方法の問題であるが、今後さらに人数を拡大して、特に今回老年層、中年層ともに〈ガ〉〈ヌ〉の両助詞が用いられた例文について多人数の調査をおこない、より一般性を求めていかなければならない。

（4）本稿では内間(1990),(1994)、内間・新垣(2000)によるところのウチ・ソト意識という概念を体言の分類に用いてきた。しかしながら、どの体言をウチと扱いソトと扱う

かという基準についてはなお疑問が残されていると考えている。これについては別の機会にゆずることにし、今後より多くの事例を検討し、ウチ・ソト意識の境界がどのように決定されるのか考えていかねばならない。

注

（1）調査は2006年8月におこなった。

（2）老年層インフォーマントは生え抜きの80代（大正11年生）女性。

（3）琉球方言において〈ガ〉、〈ヌ〉の使用を決めるのは上接する体言に大きく関わるので本論の記述においてその下接部分の形式は特に考えていない。

（4）中年層インフォーマントは生え抜きの50代（昭和22年生）男性。

（5）これは中年層の個人差によるものかと疑いあらたに一人確認したが、やはり kuri と?ari では?ari の方が〈ヌ〉を用いられるとの回答が得られた。

（6）nはnuが撥音化したもので〈ヌ〉の異形態である。

（7）前島方言の例は内間・新垣(2000)pp256~259を参照している。

参考文献

内間直仁 1990　『沖縄言語と共同体　ウチ社会の意識と言葉』社会評論社

――― 1994　『琉球方言助詞と表現の研究』武蔵野書院

内間直仁・新垣公弥子 2000　『沖縄北部・南部方言の記述的研究』風間書房

大野　晋 1978　『日本語の文法を考える』岩波書店

金城朝永 1944　「那覇方言概説」『金城朝永全集上巻』(1974 沖縄タイムス社) 所収

野原三義 1986　『琉球方言助詞の研究』武蔵野書院

－東北大学大学院生－